

知識の伝達と理論の決定不全性 —本質主義の検討を通して—

加藤 聡一郎

20 世紀後半にそれまで信じられてきた客観的真理に向かって進歩していくという科学観が否定された。新科学哲学と呼ばれる潮流及び理論の決定不全性テーゼという考えによって科学は、既存の理論から別の理論にとってかわられる不連続な運動であり、観察からどの理論が妥当か 1 つに決定することはできないとされるようになった。これらの知見を踏まえたうえで知識の伝達がどのようにして可能であるのか、なぜ我々が科学は連続しているとみなすのかについて本研究では考える。

理論の決定不全性など科学という手法に根本的な困難が存在するにもかかわらず、知識の伝達を可能にするものが何なのか考えるため、その 1 つの解決としてクリプキの本質主義を検討する。また本質主義に対する批判に反論するため社会認識論の観点から本質主義を再検討する。

クリプキの因果説は、固有名はその指示対象に対する名づけとそれが継承されていく歴史的連鎖によって決定されるとする。クリプキはさらにこれを自然種名にも適用するが、クリプキの本質主義によれば、このとき本質とみなされる特定の知識が特権化され対象に結び付けられることで正しい歴史的連鎖が起り、知識は伝達されていく。これに対し、本質の決定が目的や関心、説得力に依存しているがゆえに確固とした根拠を持っておらず不十分であるというものが本質主義に対する批判であった。

しかし、本質の決定が「目的」、「関心」、「説得力」のような科学理論の外部からくる概念に依存することを認めたとしても、知識の連続性について本質が果たしていた役割が無くなるわけではない。社会認識論の観点から考えると、そのような科学の外部からくる「非認識的価値」があるからこそ科学研究は進んでいく。

新科学哲学の潮流や理論の決定不全性によって客観的で単線的な科学の進歩が否定されても、本質主義的な考えによる知識の伝達が行われうる。本質の決定が科学の外部の価値に依存するという本質主義への批判を認めても、そのような科学の外部の価値によって本質とみなされたものこそが科学の連続性を担いうる。社会認識論を導入することで、社会的な価値による本質のプラグマティックな決定とそれによる知識の伝達を、クワインの唯物論的な傾向とは違う方法で論じることができた。

(指導教員 横山幹子)